

讚美歌21 11番

EG322 T/M Martin Rinckart

1 感謝にみちて み神をたたえん。
 すべてささげ みわざをうたわん。
 母の胎に ありし日より
 あがないたもう 神の力。

2 わがいのちの すべての日々を
恵み祝し 平和をあたえ、
いかに深き 悩みすらも
あわれみもて いやしたまわん。

3 栄光と賛美 ささげて歌わん。
 父なる神 み子と聖霊に、
 昔いまし 今もいまし
 永遠にいます ひとりの主に。

(Deutsch) 1 Nun danket alle Gott mit Herzen, Mund und Händen, der große Dinge tut an uns und allen Enden, der uns von Mutterleib und Kindesbeinen an unzählig viel zugut bis hierher hat getan.

2 Der ewigreiche Gott woll uns bei unserm Leben ein immer fröhlich Herz und edlen Frieden geben und uns in seiner Gnad erhalten fort und fort und uns aus aller Not erlösen hier und dort.

3 Lob, Ehr und Preis sei Gott dem Vater und dem Sohne und Gott dem Heiligen Geist im höchsten Himmelsthronen, ihm, dem dreiein'gen Gott, wie es im Anfang war und ist und bleiben wird so jetzt und immerdar.

(English) 1 Now thank we all our God with hearts and hands and voices, who wondrous things has done, in whom his world rejoices; who from our mother's arms has blest us on our way with countless gifts of love, and still is ours today.

2 O may this bounteous God through all our life be near us, with ever joyful hearts and blessed peace to cheer us; and keep us in his grace, and guide us when perplex'd, and free us from all ills, in this world and the next.

3 All praise and thanks to God the Father now be given, the Son, and him who reigns with them in highest heaven: the one eternal God, whom earth and heav'n adore; for thus it was, is now, and shall be evermore.

(French) 1 Béni soit le Seigneur, le Créateur, le Père; Son amour resplendit sur notre terre entière. Il nous a tout donné; tout nous vient de ses mains, Et la vie et la joie, et le pain et le vin.

2 Béni soit le Seigneur, le Fils du Dieu qui aime, Qui pour nous se fit homme et qui s'offrit lui-même. Il devint serviteur cloué sur une croix Et Dieu l'a élevé plus haut que tous les rois.

3 Béni soit le Seigneur, l'Esprit Saint pur et sage, Qui de l'amour du Père et du Fils est le gage. C'est lui qui nous unit et nous fait retrouver Le chemin de l'amour et de la liberté.

「愛は決して絶えることはありません。預言の賜物ならばすたれます。異言ならばやみます。知識ならばすたれます。というのは、私たちの知っているところは一部分であり、預言することも一部分だからです。完全なものが現れたら、不完全なものはすたれます。私が子どもであったときには、子どもとして話し、子どもとして考え、子どもとして論じましたが、おとなになったときには、子どものことをやめました。

今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔を顔とを合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知らされているのと同じように、私も完全に知るようになります。」

コロナ危機のなかで、生きる目標が失われるだけでなく、「生きがい」を失うことは、もしかしたら、感染そのものよりも深刻です。自分に、生きる動機付けが失われているのを、ある瞬間に感じることは、決して稀なことではありません。

それにもかかわらず、例えば、朝起きたとき、世界で今日何が起きているのかということに、あなたが興味や関心をもつことができたなら、どうでしょうか。現代では、ネット上に情報があふれていて、十分な根拠のない情報は8割以上とさえ言われています。そのことにも、私たちの心は、悩まされ、不信感を持っています。ここで、私たちが知りたいのは、何が真実なのかということに他なりません。日々、真実を知りたいとあなたが思うなら、それは、あなたが生きることに、何か根本的な意味を与えてくれます。

現在、インドでおきている爆発的感染のニュースにふれて、デリーやムンバイで暮らしている友人にメールを書くことが怖くなりました。フランスや中国からメールを書いてくれる方がいるのに感謝します。歴史のある時点で具体的な場所で、お互い生きていることを知るのは、重要な意味をもっています。

本日読んでいただいている聖書は、使徒パウロによる「コリントの信徒への手紙I」の第13章です。実に、この下りは、あまりにも有名なので、逆に決まり文句のようになり、深く理解されない危険にさらされています。

特に、現代では、「知る」ということが、私たちが「生きている」とことと切り離されてしまいましたから、その危険は一層大きいのです。

情報は、紙の上に書かれた文字や数値であり、形式論理であって、現実そのものを意味するものではないと理解されかけています。画像や音声すら、デジタルに保存されます。インテリジェンスということばは、自然と切り離され、生命のかけらも感じられません。

聖書では、何かを知るとは、自己と異なる(生きる)他者(お互いを不可欠とする)を知ることでした(それが、「顔と顔を合わせて見る」関係なのです)。

16世紀の科学の勃興期を生きたレオナルド・ダビンチは、神秘主義的なニュアンスではありましたが、「知ることは、愛することだ」と言ったと伝えられます(バザーリの著書)。

同時に私たちは、自分の認識や自分の考えに限界を感じていることはしばしばで、そのことを自分で吟味することも、私たちの心の重要な働きであることに気づいています。

使徒パウロは、こうした人間の限界を超えて語っています。「知識ならばすたれます。というのは、私たちの知っているところは一部分であり、預言することも一部分だからです。」そして、部分的な知識と対比されたところに、完全な愛の存在を指摘し、パウロは、「愛は絶えることがない」と言うのです。預言というと、古い時代のことばと思われませんが、フランスを救ったジャンヌ・ダルクは、預言者として王に仕えたのです。時代をよんで行動する人材を預言者と言ったのです。

このように、私たちが「知る」ことは、本来、この世で生き、「愛する」ことの一部であるのです。逆に言えば、私たちが生きながら、愛に基づかずに考えたこと、望んだことは、全て廃れるということになるでしょう。

このように考えると、本来、知識も愛の一部なのです。したがって、サイエンスによる世界の認識は、愛の働きの一部です。しかし、それは部分的で断片的で、真理とのつながりを失うと、
廃れてしまうことが重要です。

加えて最近では、情報を悪用する犯罪が急増しています。ハッカーによるネットへの侵入が、IOTで結ばれた企業ネットワークを破壊したり、情報を盗んで、これに対する身代金を要求します。

ネットによる情報では、人々は自分が見たいものしか見なくなりました。自分がみたくないものを否定し、困難や災害や病気や死は遠ざけて生きようとします。困難のなかにいる人のことや、悲惨な現実を考えないことの方が、都合がいいのです。その結果、知ることは愛することではなく、憎むこととなりかけています。コロナ危機による経済格差の拡大は、こうした傾向に拍車をかけます。

サイエンスは、真実がどれだけ危険であろうと、悲惨であろうと、真実を明かにすることは使命のはずです。これを果たせるかどうかは、サイエンスが、生命をいとおしむ心又は愛から発していることが前提です。生命をいとおしむ心のなくなった理性には、愛は存在しないと思います。

私たちが、経済学を通じて、世界に何か意味のあることができるのであれば、それは、表面的な説明、形式的発見ではなく、それによって真実に、少しでも迫るからです。

経済のグローバル化は、人類の歴史に大きな変化をもたらしました。コロナ危機を克服し、次の時代に向けて動き出すためにも、経済学で何かつごうのよい未来を夢見るのではなく、新たな真実を求めることが必要です。それが経済学を学ぶ私たちに、生きる意味をもたらすはずです。その時、知ることは、愛することの一部となるからです。